

フィールドワーク便り

「呪術師のところに行こう」

—東アフリカ・ザンジバルの暮らしの中で—

井上 真悠子*

私が滞在していたザンジバルは、タンザニア連合共和国の東端に位置する、インド洋にうかぶ島じまである。地理的にはアフリカの一部でありながら、文化的にはアラブやインドからの影響が大きい土地柄で、住民の90%以上がイスラーム教徒であるといわれている。特に、ザンジバルの中で最も大きい都市であるウングジャ島のストーン・タウンには、アラブ的な顔立ちの人々も多く暮らしている。女性たちはみな、家の中ではカンガとよばれるタンザニアの布を身にまとい、外出の際にはブイブイとよばれる真っ黒な外出着を着て、ハチミツのような甘ったるい香水の香りを漂わせている。ここはまさに、アラブとアフリカの中間点のような場所だ。

アラブ風の街並みが今も残るストーン・タウンや、奴隷貿易の歴史、クローブ（丁子）などのスパイス農園、インド洋に面したビーチといった豊富な観光資源をもつザンジバルは、タンザニアの中でも有数の観光地である。そしてストーン・タウンはインフラも整備されており、市場に行けば生活必需品から贅沢品までひととおりの物は揃い、近代的な病院や薬屋も街のあちこちにいくつも点在し

ている。若い女性たちは、ブイブイやカンガの下には派手なキャミソールなどを着て豊かな身体を美しく飾り、かかとの高い華奢なサンダルを好んで履く。口紅やアイシャドー、マニキュアやペディキュアといったお化粧も大好きだ。街を歩きながら、どこの美容院が安いか、上手いかと言い合うさまは、日本の都会の若者と大差ない（写真1, 2）。私はこれまで、合計8ヵ月ほどをこの観光地であるストーン・タウンで過ごしながらか調査をおこなった。そして私は、この土地の人々とともに暮らすうちに、近代的な都市生活にみえる暮らしの中に存在する、不思議な「問題解決



写真1 市場の風景

手前を歩いているのはブイブイを着た女性。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真2 ブイブイを脱いだ若い女性
露出の多い服やアクセサリで着飾ることを好む。

方法」を体験することになったのである。

当時、私はストーン・タウンの中の民家で下宿生活をおくっていたのだが、そこでの暮らしも3ヵ月ほどが過ぎた頃のある日、ベッドの下に置いてあったはずの、私のカバンがなくなった。私が使っていた部屋は、お世話になっていた家の最上階の屋根裏部屋のような場所だったので、そこまで上がってくるのは、せいぜい家の子どもたちか親戚の若者たちくらいのはずである。いったい、誰が私のカバンを持っていったのだろうか。

ここ数日のあいだに私の部屋に入ったのは誰だったかということ、居間で家の人たちと長々と話し合ってみたが、しかし、誰が犯人かもわからないし、どうしようもない。どうしたものか…警察かなあ、などと考えていると、17歳の長女が立ち上がり、「呪術師のところに行こう！」と言い放った。そして長女は母親に、あの辺にあいう呪術師がいたよね、というようなことを早口で確認すると、紙を取り出し、私の部屋に入った可能性のある人物の名前を書き始めた。

父親、母親、長男をはじめとして長女自身

も含めた8人の子どもたち、長男の友人が1人と、母方の叔父が2人、出戻りの腹違いの姉が1人。この腹違いの姉は、「この子のことも疑ってるなら、名前を書いていってもいいわよ。この子はまだひとりでは階段を昇れないけど」と、自分の生まれたての娘を指して笑った。名前を書き終ると、長女は私にブイブイを着せ、自分もブイブイを着込み、私の手をとってストーン・タウンの東端の大通りへと歩き出した。

タンザニアには、スワヒリ語で「ムガンガ (mganga)」とよばれる呪医・呪術師がいる。ひとくちに呪術といってもその手法や性質はさまざまで、生薬のような薬草を使うものもあれば、イスラームの聖典であるコーランを使うもの、「ジニ (jini)」とよばれる精霊を憑依させたり使ったりするものなど、いろいろな施術方法がある。

ストーン・タウンでは、呪術に関することは、おもてだつては「迷信だ」といわれることのほうが多い。だが、対岸のタンザニア大陸部のタンガ州からも出稼ぎの呪術師がザンジバルにきているといわれるくらい、ザンジバル社会における呪術師の需要は高く、それは都市部であるストーン・タウンにおいても例外ではない。人々が何らかのトラブルや困難に遭ったとき、その解決方法として彼らの頭に思いうかぶのは、けっして近代的な病院や警察だけではないのである。

私の手を引いて歩いていた長女は、ストーン・タウンの外れにあるモスクに隣接する建物の中に入って行った。建物の奥には女性ばかりがいる部屋があり、さらに奥には、薄暗

い寝室があった。長女はそこでひとりの老女に面会を申し込み、私を連れて薄暗い寝室の中へと入って行った。

長女は老女に、私の部屋の様子と、カバンが置いてあった状況を説明した。老女はひとしきり長女の話の黙って聞くと、私の部屋に入った人たちの名前はわかるかと長女に訊いた。長女が家でいくつかの名前を書いてきた紙をみせると、老女はおもむろに厚い革表紙の本を取り出した。日記帳のように鍵がかかるようになった、古い本である。

老女は本に革紐と金属製の短い棒を取り付けると、金属棒の片端を長女に指一本で支えさせ、もう片端を自身の指一本で支えた。ふたりの指で支えられ、革表紙の本は空中にぶら下げられた。そして、老女は長女に、ひとりずつ名前を読み上げるように指示した。長女は緊張した面持ちで、ひとりひとりの名前を読み上げていく。すると、長男の友人の名前を読み上げた瞬間、本がくると回った。つまりこれは、犯人探しのためのダウンジングだったのだ。

老女から、「犯人にこのことを知らせてはいけない、そのまま明日を待て」という指示を受けて、長女と私は家に帰った。すると翌日、カバンは私のベッドの下に戻っていた。さすがにその日は部屋に鍵をかけていたし、その一日のあいだには、犯人だといわれた長男の友人どころか、長女も含めた子どもたちも、誰も私がいなくなるときに部屋に入った人はいなかったはずなのに…。

カバンが出てきたからくりは、いまだによくわからないままである。しかし、ダウンジ

ングの真偽のほどはひとまずおいておくとして、まずはカバンがなくなったというトラブルに際し、長女の頭の中に即座に「呪術師」という選択肢がうかんだことに、私は正直のところ驚いていた。しかも、呪術師に会いに行く前に犯人候補たちの名前を準備する必要があるということを、家族たち全員が当たり前のこととして知っていたのだ。老女の所在地はすぐにわかったのだから、もしかしたら彼らは以前にもこの老女に何かしらのトラブルの解決を依頼したことがあったのかもしれない。しかし、それよりも何よりも驚かされたのは、カバンが出てきたあとの「やっぱり呪術師ってウソツキね！ カバンは家にあったんじゃない！」という、長女の一言であった。自ら呪術師のところに行こうと言い出し、犯人がわかったときにはショックを受けて、「やっぱり彼は普段の素行からして悪いと思っていたのよ！」などと悪口を言っていたくせに、カバンが出てきた途端、まるですべての出来事がなかったかのように呪術師の怪しさをあざ笑い、犯人といわれた長男の友人に対しても、その後にはいつでもどおりに平然と接していたのである。

ザンジバルで暮らしていると、こういった不可解な経験は、挙げるときりがなくいろいろなと出てくる。調査がうまくいかなくて夜中にひとりで泣いていたときには、心配して様子を見に来てくれた長男に、「ああ、頭の中の『虫』が悪さをしてるんだね。あなたもジニをもっているの？ うちのママもそうで、突然知らないはずのアラビア語をしゃべりだすんだよ。だから、大丈夫」と言って

慰められたことがあった。彼が言うには、私の頭の中には「虫（ジニ）」がいて、それが悪さをするから私は泣いているらしいのだ。しかし、翌朝になってもう一度ジニの話をしようとする、と、長男は笑って私をバカにするような冗談を言い、はぐらかすばかりであった。

ほかにも何度か複数の人に「ジニもち」であると指摘された私は、ジニを祓うための治療儀礼に参加したこともあった。ある時には、モスク内で30～40人ほどの男女と一緒に5メートルくらいの大きなゴザを頭から被り、中で薬草の蒸気を浴びる「ヨモギ蒸し」のようなサウナ療法を施された。一緒にゴザの中に入っていた人の中には、彼らの「ジニが暴れだした」らしく、トランス状態になって叫びだす人や暴れだす人もいた。

また、ジニの憑依をともなう治療儀礼をおこなう呪術師のところでは、私は頭から大きな布を被せられ、薔薇の香水をかけられ、「ウディ (udi)」とよばれる少し甘い匂いのする香木を焚かれてその煙を吸わされた。そして、部屋の隅に置かれたテープレコーダーから流れる“*Baharini kuna njiwa manga na mandege na njiwa manga...* (海には鳩と鳥がいっぱい...)”という、スワヒリ語の歌のような呪文を聞いているうちに、強い倦怠感と眠気におそわれた私の身体は震えだし、口が痙攣し、勝手にしゃべりだしたこともあった(写真3)。

しかし、これらのことも、日常の文脈の中で誰かにしゃべれば、「お前、なんで呪術師のところになんか行ってるんだよ!」と、バ



写真3 ジニの憑依儀礼を受けている筆者
奥にいる男性がムガンガである。

カにされたり笑われたりするようなことなのである。

スワヒリ語でムガンガというときには、占い師から薬草治療師、イスラームに関係する治療師、ジニの憑依儀礼をとりおこなう者まで、さまざまなタイプの施術者が含まれている。それらに共通するイメージは、「怪しげな治療をおこなう」というものであり、おもてだっては、近代医療や近代国家の行政などとは異なる、非科学的で時代遅れな迷信として扱われている。

しかし、そうして「怪しいもの」として扱いながらも、ザンジバルの人々の生活の中において「呪術師に相談する」という選択肢は、近代的な病院や警察などと同じように「さまざまなトラブルや困難を解決するための方法のひとつ」として、現代においてもたしかに存在しているのだ。何が科学的で、何が怪しいことなのかといったことは、問題が解決されたあとになってからなされる会話であり、問題の渦中にいる人間にとっては、科学的であろうがなかろうが、とにかく問題が解決されることが最優先なのである。だから

ら、もしまたトラブルや困難に直面した時には、人々は再び「呪術師のところに行こう」と言うのだろう。たとえ、問題が解決した後

には「呪術師って、インチキだよな！」なんて、笑ってバカにしていたとしても。

同じかまの飯を食べて

片 山 祐美子*

「シンキロー」。ある日の昼下がり、朝の調査を終えて村の人たちとベンチに寝そべって昼食ができあがるのを待っていた私の耳に、聞き慣れた言葉が入ってきた。蜃気楼？何のことだろう。以下はそのシンキローにまつわるお話。

私の調査地は、西アフリカのガンビアという小国にある。「調査地はどこ？」と聞かれ、「ガンビアです」と答えると、必ずといっていいほど「あー、ザンビアね」という答えが返ってくる。そんな、あまり広く認知されていないこの国は、国土の西約80 kmを大西洋に面しているのを除けば、セネガルにぐると三方を囲まれて東西に細長い。くにゃくにゃと蛇行し、ミミズのような格好をしている。東から大西洋に向かって流れるガンビア川に沿って国境が走っているせいである。この奇妙な形が、ときに、ガンビアを「セネガルの横っ腹につきたてたナイフ」、「セネガル・パンにはさんだガンビア・ホットドッグ」などと形容させる。

調査のために約1年を過ごしたバンタント

村はガンビア川の中流域にある。ガンビア川に生息する豊富な魚たちを利用して暮らす漁撈民が生活しているのかと思いきや、そこにはマンディンカと呼ばれる農耕民が暮らしていた（写真1）。

彼らは雨季にコメや雑穀といった主食作物を栽培して暮らしている。女性は村から1 kmほど離れた水田でイネを育て、乾季には小さな井戸をたくさん掘った畑で毎日水やりをしながら野菜を栽培し、労働に励んでい



写真1 村の風景

密集する家の周りに雑穀畑が広がっている。電線がみられるが村に電気はない。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科